

つれづれなるままにーとあるおっさんの四方山話

第27回 昔の空中写真を見て思うこと

とあるおっさん

筆者は農地の様々な状況を遡って調査するため建設省国土地理院（当時）の空中写真を購入し、実体鏡を使って調査をしていた。その頃、空中写真を購入するにあたっては、まず目的地を含む地域の紙の標定図（撮影位置を示した地図）を郵便で送ってもらい、そこからエリアを絞って写真撮影のコースと番号を選んで注文していた。送られてくる写真はもちろん印画紙に焼かれた正に画像である。

現在は、各時代の空中写真について、標定図どころか写真そのものが、国土交通省国土地理院のホームページで公開されている。ただし、閲覧できる写真は400dpiで、それ以上の高解像度の写真が必要なときは購入手続きをとらなくてはならない。

ところで、この国土地理院の空中写真で全国にわたって入手可能な最も古い写真は、終戦直後に米軍が撮影した写真であった。鮮明度がやや落ちる写真が一部にあるのは残念であるが、1940年代後半のわが国土の状況を知ることができる貴重な資料である。これに加えて、大都市近郊や全国の鉄道沿いには、縮尺の大きい写真が撮影されていて、これは幹線だけでなく一部のローカル線に沿っても撮影されていて、国土地理院の「地図・空中写真webサービス」の検索画面で、撮影年を1945年から1948年にして縮尺を1/20000以上に絞ると、当時の鉄道路線図が浮かび上がってくる。

最近、その国土地理院の「地図・空中写真webサービス」の検索画面を久しぶりに覗いてみたところ、米軍撮影より前の空中写真が公開されていることに気がついた。検索方法で撮影年を1945年までとすると、平野部や海岸線を中心に写真撮影地点が示される。撮影計画機関は陸軍となっている場合が多いが、撮影年は空欄になっていることも結構多い。その検索画面上でカーソルをあちらこちら動かしていくと、新潟県の内陸に他の撮影地区から独立した地区を見つけた。

この地区、山中に開けた盆地のような所なのだが、10年ほど前に偶然にも筆者はこの場所を山の尾根から眺めたことがあった。筆者の好きな農村風景の一つ、四方どちらを見ても山が見える村。しかも耕作放棄地がない（正確には見えないかもしれないが）ところ。筆者の故郷も、本記事第14回などでつづったように四方どちらを見ても山で、その懷に抱かれているようなところだった。そんな所で育ったためか、筆者は山に囲まれたところに立つと気持ちが落ち着く。現在住んでいるような平野の真ん中は、寄り掛かる所がないような気がしてどうにも落ち着かない。

その10年ほど前に撮った写真、高校生や大学生の皆さんが農村工学研究部門の見学に来て頂いた時に、筆者は農村工学とは何かを説明するスライドの背景に使っていた。麓の

村が見えたので何気なく撮影した写真であるが、四方を山に囲まれ箱庭のようになった小盆地の一面に水田が拓かれ、その中に家々を囲む木々や鎮守の森が島のように浮かび、そして何よりもこの中に耕作放棄地がほとんど見えていないのが、筆者としては何よりも気に入っていたからである。戦前か戦中に何の目的でこの地域の空中写真が撮影されたのか分らないが、一面の水田の中に家々が並ぶ姿は最近と変わらない。水田の圃場整備が行われ家々を囲む木々が大きくなっているのが一番大きな変化である。この写真の撮影年等は表示されていないが、写真の地域では少なくともここ数十年の間、最も重要な地域の資源、土地資源とそれを潤す水資源が人々によって受け継がれているように見える。



左 山歩きの途中で麓の村を撮影した写真 2009年（筆者撮影）

右 左写真の赤丸中心付近の集落を1945年以前に撮影した空中写真

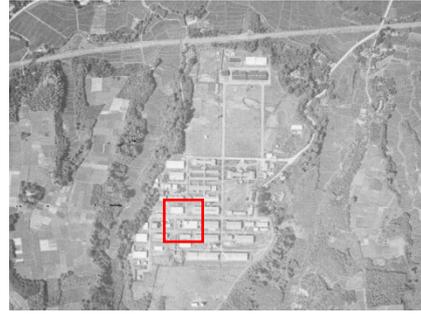
国土交通省国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス CB661YZ-C3-18

<https://mapps.gsi.go.jp/contentsImageDisplay.do?specificationId=714265&isDetail=true> を加工

戦前、戦中の空中写真、東京近郊はかなりの地域がカバーされている。そこで、筆者が故郷を離れたのちに通っていた東京近郊の中学校と高校のあたりを見てみた。この二校は数百メートル離れた所にあったが、昭和16年撮影の写真で見ると中学校は見覚えのある校舎が写っているが、高校のあるところは一面の畑である。申し添えておくと、現在の新制中学校が戦前からあった訳ではないので、校舎は筆者が通った学校とは別の学校で校舎として使われていた。

次に、筆者の出身大学である明治大学の農学部がある所を見てみた。ここは陸軍の研究所であった所であるが、1941年の空中写真には、筆者の知る農学部校舎とほぼ同じ建物が記録されている。

筆者はもちろん戦後生まれであるが、育った環境にはまだ戦前、戦中の戦争に関係した施設等が多く存在し、その時代のお話を聞くことも多かった。



左 筆者の知る明治大学農学部（1978年）筆者撮影

右 陸軍撮影の空中写真（1941年）国土交通省国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス

CB661YZ-C3-18 <https://mapps.gsi.go.jp/contentsImageDisplay.do?specificationId=740174&isDetail=true>
を加工

1978年の写真には、1941年の写真の赤枠内あたりの建物が見えている

さらに、筆者の現在の勤務地、筑波農林研究団地は戦中までは軍の飛行場だった所なので、陸軍撮影の写真が公開されていることを期待したが、残念ながら見当たらなかった。戦後の1947年に米軍が撮影した写真では、現在の農村工学研究部門敷地の北側ぐらいに舗装されているらしい部分があるが滑走路らしきものは判然としない。周辺には高射砲か何かを設置していた跡のようなものが見えているが、一部はすでに農地として使われているようである。農林研究団地建設以前のこの場所も少し探してみたいと思っている。

最後に筆者を育んだ北海道の山間の町について、街があった時とその跡地を町外れの神社のある山から見下ろした斜め写真でお示ししたい。ここは炭鉱の街で、その後下流にダムも建設されることになり、無人地帯に帰ることはある意味必然であった。わが国の中山間地域の農山村が、このような無人の地となることがないように努めていきたいと、今も筆者は思っている。



山に囲まれた筆者の故郷の街。左 1969年 右 2001年。現在は一部が拡大したスーパーパロ湖に沈んでいる。（いずれも筆者撮影）